

神奈川県立こども医療センターの基本理念と基本方針

1. 基本理念
こどもの健康の回復及び増進と福祉の向上のため、最善の医療を提供します。
2. わたしたちのちかい
あなたの「げんき」と「えがお」のためにみんなでちからをあわせます。
3. 基本方針
 - (1) 患者さんの命と安全を第一に考えます。
 - (2) 患者さんとご家族とともに医療を行います。
 - (3) 高度、先進的な医療を行うとともに、積極的に臨床研究に取り組みます。
 - (4) こどもの発育、発達を考えた療養環境、教育環境を整えます。
 - (5) 周産期・小児医療と保健・福祉に携わる人材育成に努めます。
 - (6) 地域の関係機関と連携し、周産期・小児医療の充実、向上に貢献します。
 - (7) 透明度の高い病院運営と情報公開に努めます。

◆神奈川県立こども医療センター・研修のご案内◆

第6回 胎児心臓病遠隔症例報告会

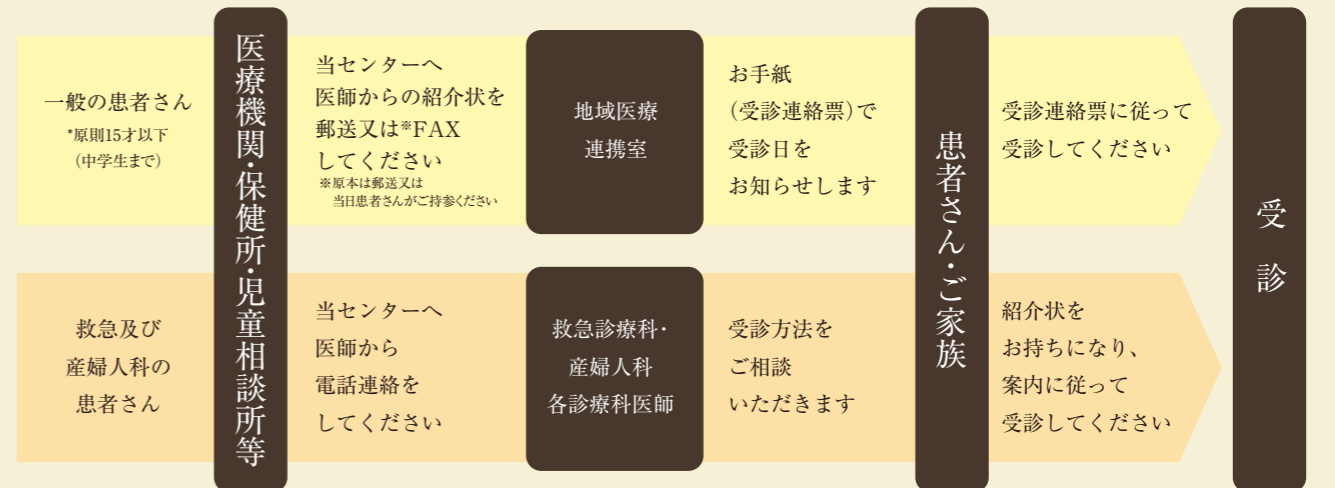
- ☆ 日時：平成30年8月17日（金）18:00～19:00
- ☆ 場所：当センター周産期棟地下1階 会議室
- ☆ お問合せ：地域医療連携室
- ※ 詳細はホームページに掲載予定

第16回 小児科セミナー

- ☆ 日時：平成30年9月8日（土）、9日（日）
- ☆ 場所：当センター本館2階講堂
- ☆ お問合せ：地域医療連携室
- ※ 詳細はホームページに掲載予定

【紹介予約受診システム】

当センターは、医療機関や保健所等の医師からご紹介いただいた患者さん原則 15才以下（中学生まで）が、初診の予約をお取りになり受診していただく「紹介予約制」を取らせていただいております。予約の方法・手続きにつきましては下記をご覧ください。



※ 紹介状の添付資料(紹介状の添付資料(画像CDやフィルム等)も紹介状と併せて事前にお送りください。
 ※ 紹介状用紙(料金受取人払)の送付をご希望の場合は、地域医療連携室までご連絡ください。

【編集・発行】 地方独立行政法人 神奈川県立病院機構 神奈川県立こども医療センター 地域医療連携室
 〒232-8555 神奈川県横浜市中区六ツ川 2-138-4 TEL：045-711-2351 (代) FAX：045-710-1933
 Home Page：http://kcmc.kanagawa-pho.jp



地方独立行政法人 神奈川県立病院機構
 神奈川県立こども医療センター

地域医療連携室だより

未来の社会づくりのための

地域連携をめざして

地域連携・家族支援局長
 新生児科医師
 星野 陸夫



神奈川県立こども医療センターは、医療を中心として、小児に関わる人的・質的なリソースを豊富に保有しています。そしてそれらすべてが、日頃から分野の垣根なく結びついて有機的に機能していると自負しています。うまく外部の力と結びつけて行くことができれば、前述のさまざまな課題に対しても大きな役割を果たすことができるでしょう。

予防接種の普及や抗生剤治療の進歩によって、重症感染症に苦しむ患者さんは減りました。治療・管理ガイドラインの整備によって、気管支喘息に代表される入院治療を必要としていた慢性疾患も、外来管理で安定を保てるようになってきています。それに替わって、食物アレルギー、発達障害、虐待、貧困、在宅医療、慢性疾患の成人移行など、病院の中で行う医療だけでは解決できない多くの社会的な課題が表

面化してきました。こうした課題の多くは、これまでも小児医療者として関わってこなかったものではありませんが、現在の保険診療の枠組みに沿っているだけに、十分な関わりを持つことが難しい状況にあります。いずれの課題においても、病院内外の多職種やご家族とのつながりの中で、情報共有しつつ解決策を見つけていくステップを踏んでいく事が求められています。

未曾有の少子高齢化社会に立ち向かおうとしている現代だからこそ、すべての人が安心して子どもを産み育てられる社会づくりが求められています。そのためにこども医療センターは、地域社会に自ら歩み出て行って、たくさんの方々の助けをいただきながら課題解決に力を注いでいきます。そして地域連携・家族支援局は、こども医療センターと地域を結びつける開かれた窓口として働いていきたいと考えています。どうぞよろしく願っています。

平成30年7月

VOL.36

登録医療機関数

728件

<H30.6現在>

「今の子ども達は幸せか？」

患者家族支援部長
総合診療科医師
田上 幸治



世間は少子高齢化が進んでいます。総人口に占める65歳以上の高齢者人口の割合は27.3%（平成28年10月1日）となっています。一人の女子が生涯に産む子どもの数に当たる合計特殊出生率は、2005年に1.26を記録してから緩やかに回復しましたが、1.4台にとどまっています。少ない子どもを多くの大人が手厚く見る社会といえば、行き届いた手厚い養育がなされるように思いますが、そうとはなっていません。疾患概念の広がりや相談できる人が少ないなど、親は育児不安に苛まれています。

生活の場と就労の場は距離的に離れていることなどから、コミュニティは破壊し、ややもすれば、各家庭が蝸壺に入り込んでいるような孤立感の中で生活しています。ゴリラの研究をしている京都大学の総長山極壽一先生によれば、人の社会生活は、ゴリラのものと似ているということです。ゴリラは、信頼できる仲間と一緒に暮らすことを好み、子育てもみんなで共有しています。そんな環境の中で、子どもは育ち、親も親として育っていきます。そのような環境が無い今日には、親として、社会としての、育児能力が低下してきています。

子どもの貧困は深刻です。子どもの相対的貧困率は、2012年に16.3%で、子どもの6人に1人が標準的な生活水準の半分未満（親子3人ですと年収207万円）で、特にひとり親世帯の子どもの貧困率（年収約170万円）は51%とOECD加盟国で最悪になっています（2010年前後）。不適切な養育環境があり、子どもの福祉が守れないことは容易に想像できます。不適切な養育環境に育った大人が親になった時、子どもに適切な養育環境を提供できないとい



2年前に学会で行ったカルガリー

う負の連鎖が、貧困と共に連鎖されていきます。そして、このような育児不安、育児能力の低下、貧困、不適切な養育環境などが負のスパイラルとして、継続されています。このように子どもを取り巻く環境は、複雑化、深刻化しています。このことを、解決する為には、どこか、教育現場や市区町村や病院や児童相談所など、どこかの施設が、ワンストップで解決することは無理です。教育、医療、行政、福祉、民間団体などや、場合に

より児童相談所や警察や検察が協力しながら解決していく必要があります。このような、ネットワークが強く、血の通ったものとなるためには、お互いの機関が、お互いの仕事や働きを理解すること、そして、協力するため

に顔の見える関係を作ることが必要です。三次医療機関である当センターには、様々な地域から、重度な疾患や稀な疾患を持つ患者が通院しています。そして、地域の医療機関、教育機関、行政、児童相談所などと協力しながら診療してきました。警察、検察との協力は始まったばかりですが、子どもの最善のために様々な機関が協力する必要があります。

つながろう

苦しむ子ども達のために

つながろう

お互いが分かりあえるために

つながろう

より大きな力のために

つながろう

喜びを分かち合うために

つながろう

子ども達の未来のために

